



ドイツの上空で空中給油を受けるためKC-135とランデブーしたVAQ-134のEA-18G。主翼と胴体の下の増槽に加え、AN/ALQ-99ジャミングポッドを搭載、またインテイク後方に自衛用のAIM-120 AMRAAM空対空ミサイルを搭載しているが、F/A-18Fをプラットフォームとした機体のため速度性能に優れ武装できることから、ストライクパッケージ（合同攻撃部隊）に同道して電子戦支援を行なえるのが同機の最大の強み。左ページ下の切り抜き写真はVAQ-134関連のパッチで、左から正式な部隊インシグニアパッチ、同隊所属空軍クルー用のシールド（盾）型パッチ、シュパンダーレムに展開する各米軍部隊でそれぞれのマークを入れたデザインが用意された対ウクライナ侵攻パッチ（PVC製）。

VAQ-134 in GERMANY BESIDE OF UKRAINE CONFLICT

ロシアのウクライナ侵攻の陰でドイツに派遣された電子攻撃飛行隊VAQ-134 “Garudas”

Photography by Danny REIJNEN, Patrick ROEGIES & Ben GORSKI
Main Story by Patrick ROEGIES, Ben GORSKI & Jurgen van TOOR

2022年3月28日、NATOの集団防衛体制の強化を目的に、加盟国やパートナー国との航空統合作戦能力を向上させる米海軍の遠征電子攻撃飛行隊、VAQ-134 “Garudas”のEA-18Gグラウラー 6機がドイツのシュパンダーレムABに展開した。2月24日に生じたロシアによるウクライナ侵攻を受けて米政府が打ち出した一時部隊派遣によるヨーロッパ域の防衛力強化の姿勢を具現化したもので、以降USAFE（在欧米空軍）やNATO同盟国などと電子戦訓練を行なっている。またVAQ-134の配備には、当然紛争がエスカレートした場合に備えた電子戦能力拡充の意味も含まれる。EA-18Gでの敵レーダーシステムの妨害のほか、敵対空脅威の制圧など、敵防空網への対抗措置には大きな効力を発揮するため、ロシア側の戦闘拡大に対する抑止効果も期待される。VAQ-134のジェームズ “Homeskool”

コリン少佐は「われわれはワシントン州NASウィドビーアイランドに5個飛行隊が配備されている統合電子攻撃飛行隊のひとつで、空母派遣部隊と違いNECC（海軍遠征戦闘司令部）の指揮下にはありません。海軍電子戦部隊を統括するCOMVAQWING PAC（太平洋電子攻撃航空団司令部）の司令デイビッド F.ハリス大佐の指揮のもと、『人員・訓練・装備』を統括した運用にもとづいて、必要に応じて世界各地に派遣されます。戦術的には展開先の指揮官がわれわれの運用を管理、今回のドイツ展開においてはEUCOM（ヨーロッパ軍）がわれわれの直接の上級組織となります」と説明する。展開に際し、国防長官は統合参謀本部の勧告にしたがって遠征飛行隊の配備を要請、VAQ-134は96時間での展開命令を受けた。あくまでもこれは正式通達による対応で、それ以前に「ヨーロッパへの急速展開の可

能性がある」という情報を受け取り、多岐にわたる正式な展開準備のためのごしらえが始められた。実際に下令されてからの時間が短いことは想定されていたため「夜中の急な電話やメールで混沌と準備を始めるのではなく、必要なことを前もって準備することが大切でした」とコリン少佐は話す。一方で受け入れ側となるシュパンダーレムABはその地理的条件からも遠征展開部隊の受け入れには慣れており、宿泊施設などのインフラも充実している。52MSG（第52作戦支援群）のラッセル・オスター副主任もVAQ-134の遠征展開準備はスムーズだったという。「展開準備という仕事は実際の飛行をとまなうパートほどエキサイティングではありませんが、食事や休息、政府とのネットワークのアクセス、作戦立案スペース、必要な機器のロジスティックなどは展開作戦を成功させるために重要な要

素です。海軍も、展開前に経験豊富なスタッフを5人派遣して対応してくれました」シュパンダーレムでは、展開作戦遂行に必要な手配がされていた。電子戦機という特殊な機体を維持するために、基地内の特別なスペースが用意され、またホストユニット52FW（第52戦闘航空団）隷下の52OSS（第52作戦支援中隊）は部隊運用に必要なさまざまなサポートをプロフェッショナルにこなしてくれた。空軍基地内でのコンピューターネットワークの確立やアカウント取得なども、現代の作戦には重要だ。またEA-18Gの整備態勢については52OSSでは対応できないことから、VOD（バン作戦分遣隊）と呼ばれる小規模ながら同機と電子戦装備関連のあらゆる整備に対応できる整備要員部隊をウィドビーから同行させた。EF-111が退役して以降、米空軍からジェット戦術機の電子戦機は姿を消したため、

その分野で当時EA-6Bを運用していた海軍の力を借りるシステムが立案された。同時に陸上基地ベースで活動する海軍遠征電子攻撃飛行隊には空軍の人員も派遣され、海空軍合同で統合運用されるようになった。「現代のアメリカ軍はほとんどの場面で統合作戦が基本に据えられており、国防総省のネットワークも最初からそのように設計されています。海軍と空軍の装備やシステムにも互換性があり、無線やデータリンク、そのほかの手段でやりとりができます。今回の展開でも、われわれはE-3 AWACSや52FWのF-16、私たち同様に遠征展開中のF-35A、さらにいくつかのNATOパートナーと協力してフライトしています」とコリン少佐。また「現代の戦闘ではリスクを適切に管理し、ミッションを達成するために各国、各軍種間でのコミュニケーションは重要です。演習などで戦術を共有し、進化

する脅威に対応するためのシナリオにも適応するうえで、各種航空機や各軍の協力は不可欠ですが、EA-18Gはそのセンターに位置して、異なるプラットフォームに対する適正なリスク軽減する必要があります。これはわれわれ遠征飛行隊のユニークな一面でもあります」と説明する。作戦中のリスク軽減に電子攻撃機の存在は重要で、EA-18G以外に空軍はEC-130Hコンパスコールを保有しており、今後それはEC-37Bに更新される予定となっている。しかしEC-130HやEC-37Bは戦闘機ベースのEA-18Gとは違い、スピードが遅く自衛能力も限られているため戦闘空域近くにとどまることはできない。「EA-18Gの最大の利点は、ジャミングポッドに加えHARM対レーダーミサイルや自衛用空対空ミサイルが搭載でき、最前線で活用できることなのです」とコリン少佐は説明する。



【上2枚】 上はシュバンダーレムABを離陸するVAQ-134のEA-18G。全見開き写真の機体と同様、同隊側面のステーションに自衛用のAIM-120C AMRAAM中距離空対空ミサイルを搭載している。下は、同隊と同様にワシントン州フェアチャイルドAFBから遠征空中給油部隊としてシュバンダーレムに派遣されているAMC (航空機動軍団) 92ARWのKC-135R。主翼下に装備されたドロッグポッドに注目。

↓ シュバンダーレムで離陸待機中のVAQ-134のEA-18G (NL530)。フルカラーの司令機だが、同隊を含む5個の統合遠征飛行隊は空母航空団には所属していないため、「NL」の共通のテイルレターを垂直尾翼に記入、VAQ-134は530番台のモデックスが割り振られている。なお、同隊は急遽ヨーロッパ遠征が決まるまで、2022年前半三沢基地に派遣される計画だった。

↑ KC-135Rの主翼端に搭載されたドロッグポッドから給油を受けるVAQ-134のEA-18G。基本的には複座型スーパーホーネット、F/A-18Fと同じエアフレームだが、機首のM61A1 20mm機関砲は搭載されておらず、後部胴体にも電子戦用機器が追加搭載されている。最大の外見上の特徴は、AIM-9用ランチャーに換えて主翼端に装備されたAN/ALQ-218(V) 2受信アンテナ。



← ドイツ西部、ルクセンブルク国境に近いシュバンダーレムABのHAS (強化型航空機シェルター) で待機中のEA-18G。機首右上部の空中給油プロープが展開されている。同基地には米空軍USAFE 52FW所属480FS (第480戦闘飛行隊) のF-16CM/DMブロック50が配備されており、EA-18G同様AGM-88 HARM対レーダーミサイルでのSEAD (敵防空網制圧) 任務にも従事する。VAQ-134は480FSと合同SEAD訓練も実施したそうで、NAWDC (海軍航空戦開発センター) のグラウラー戦術教官だった前述のコリン少佐は、同隊から定期的に空軍のWSINT (兵器学校情報フェーズ) にもクルーを送り、協調を図っているという。





⇄ 過去には多くの戦闘機部隊がUSAFEに配備されており、シュパンダーレムABではA-10飛行隊も活動していたが、現在ヨーロッパに恒久的に駐留している戦闘機部隊はシュパンダーレムの52FW (480FS) とイタリア、アビアーノABの31FW (510FS、555FS) のF-16 CM/DM、前述のレイクンヒースの48FWのF-35A (F-15C/Eから機種転換中) のみ。これらを米本土から派遣される遠征部隊が支援する態勢が今後も続けられることになるが、先ごろの発表で在日米空軍の18WGもF-15の運用を終了し、遠征部隊を配備することになった (P.50~参照)。

↓ 遠征部隊の先駆けともいえるのが米海兵隊。岩国のMAG-12や普天間のMAG-36など、正規のUDP (部隊展開プログラム) を長年実施しているほか、有事に呼応するかたちの即時部隊展開能力にも長けており、現在、ヨーロッパにはVMFA-323のF/A-18C 10機が遠征中だ (イタリアのアビアーノに駐留)。ただし海兵隊の遠征部隊は海軍や空軍の遠征飛行隊とはやや性格が異なり、多くの場合統合作戦よりも自隊の揚陸・地上勢力の支援を行なう作戦に投入される。写真のF/A-18C (WS401) はカラーマーキングのCO (飛行隊長) 機で、茶色く塗られたスピードブレーキにはガラガラヘビの尻尾が描かれている。



【3枚】 バルト3国やアイスランドでの航空哨戒を含めて、ヨーロッパ域での安全保障体制維持にともなうNATO各国の航空部隊派遣は活発で、米空軍によるヨーロッパへの遠征飛行隊配備も近年継続的に続いている。シュパンダーレムABにはEA-18G、空中給油飛行隊に加えて、ロシアによるウクライナ侵攻直前の2022年2月16日から、ユタ州ヒルAFBの388FW/34FS (第388戦闘航空団第34戦闘飛行隊) のF-35A 12機も配備された。6月に行なわれたNATOサミットに参加したジョー・バイデン大統領は、ウクライナに侵攻したロシアに対しては、イギリスのRAFレイクンヒースに配備された48FWのF-35A 2個飛行隊が不測の事態に対応するとしたものの、一方でUSAFEの新司令官ジェームズ B.ヘッカー大將はアメリカからのF-35A飛行隊の遠征展開も続けるとした。34FSのF-35Aは8月までシュパンダーレムに駐留 (一部はバーモントANG 158FWと5月に交替)、その後アラスカ州JBエルメンデルフーリチャードソンから派遣されたPACAF (太平洋航空軍) 3WG (第3航空団) のF-22Aが交替で展開している (次頁参照)。なお、シュパンダーレムの52FWはポーランドのワスクにDet.1 (第1分遣隊) を置いており、F-22Aも同基地に展開した。

